

VR 体験を通じた発達障害に関する理解の変容

○山下桃佳・#蓑崎浩史

(広島修道大学大学院人文科学研究科)・(広島修道大学健康科学部)

目的

発達障害の一つである ASD においては、感覚過敏と呼ばれる光や音などを含む特定の刺激に対する特異な知覚体験を有することがある (APA, 2013)。このような知覚体験の違いは、周囲の人には理解されづらいことが指摘されている (森戸他, 2017)。

本発表では、大学生を対象に実施した ASD の感覚過敏 (視覚および聴覚) に関する Virtual Reality (VR) 体験によって、ASD に対する理解の変容が促進されるかどうかを検討した結果を報告する。

方法

参加者 4 年制私立大学の学生 23 名が参加し、回答に不備の無かった 18 名を分析対象とした (男性 4 名, 女性 14 名, $M=20.5$ 歳, $SD=1.32$)。

測度 ①自閉性スペクトラム障害の障害特性に関する知識尺度 (酒井他, 2014) の 44 項目を使用した。酒井他 (2014) に基づき、事前事後調査で 22 項目ずつに分けて使用し、問題に正解すると 1 点、不正解または分からないは 0 点とした。②社会的距離尺度日本語版 (吉岡・三沢, 2012) の 5 項目を、ASD の人に対する社会的距離を測るものとして教示を変更して使用した。点数が高いほど社会的距離が遠いことを示した。

体験会の概要 2023 年 12 月上旬に「みんなで VR 体験会！発達障害を知ろう！」という体験会を実施した。参加者は、ASD の特徴に関する講義を受けた後、ASD の視覚・聴覚過敏を体験できる VR 機器を装着し、VR 体験をした。その後、気づきや理解などについて振り返りを行った。また体験会の開始時 (Pre) と終了時 (Post) に、測度①および②への回答を求めた。

倫理的配慮 体験会の開始時に、目的や内容、個人情報を含む回答データの取り扱いなどを説明し、自由意思で参加および不利益なく中断できることを伝えた上で同意を得て実施した。

結果と考察

ASD の知識に関する問題の正答数は、事前調査

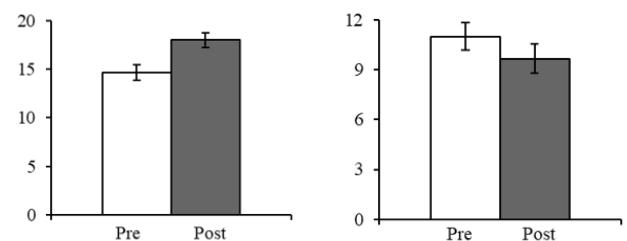
に比べて、事後調査の方が有意に増加した ($t(17) = 4.45, p < .01, d = 1.00$)。また、社会的距離得点は事前調査に比べて、事後調査の方が有意に減少した ($t(17) = 2.36, p < .05, d = .37$)。

このような結果が得られた要因としては、ASD 特性に関する知識教授 (講義) を受けたことや、VR 体験を通じて感覚過敏を体験的に理解できたこと、VR 体験後に参加者同士で気づきや理解について話し合ったことが挙げられる。たとえば、精神疾患患者に対する社会的距離については、先行研究において、無理解や知識不足によって生じやすいことが指摘されている (鳥居他, 2019)。このことを踏まえると、今回実施した体験会によって、ASD に対する無理解や知識不足が改善された可能性があると考えられる。

しかしながら、本研究の限界として、統制群がなかった点、従属変数の変化において、ASD に関する知識教授 (講義) の影響と VR 体験の影響を切り分けて解釈することができない点が挙げられる。したがって、今後は、群設定など実験計画上の工夫が必要だと考えられる。

Figure 1

ASD の知識問題の正答数 (左) と社会的距離 (右) の変化



付記

本 VR 体験会は、広島修道大学同窓会「広島修道大学チャレンジ支援金」の助成を受けて実施されました。

VR 機器は正規の料金を支払って借り受けたものを使用しました。

また、広島修道大学人文科学研究科心理学専攻 (当時) の権藤氏、原田氏、広島修道大学健康科学部心理学科 (当時) の吉岡氏、温品氏には企画運営においてサポートを頂きました。連名には及ばないとのこと意向でしたので、この場をお借りして感謝申し上げます。